



第39号(2025年秋号)

発行日 2025年12月2日

信州大学教職支援センター

Shinshu University  
Center for the Teaching Profession



# 教職支援センター ニューズレター

## 巻頭言 【重要なことは児童生徒の内面を深く見取ること】



まず、下記の文章（反省文）をお読みいただきたい。

「このたび私は、万引きという大変恥ずかしいことをしてしまいました。謝って許されることではありません。謹慎している間は、自分自身をしっかりとみつめ、自分がいかに甘く、駄目な人間であったのかがよく分かりました。私を大切に育ててくれている両親だけでなく、温かく見守って下さっている先生方の信頼を大きく裏切ることになり、心から反省しています。今回、謹慎という処分を受けましたが、私にとって謹慎することによって、自分のことを考える時間を与えていただき、謹慎処分を受けたことを今は感謝しています。

今回の件で、本当に多くの方々にご迷惑をおかけしました。万引きしてしまったお店の方、両親、そして私を心配して叱って下さった多くの先生方に申し訳ない思いでいっぱいです。こんな駄目な私に対して、温かいお叱りの言葉を言って下さった先生方には心から感謝しています。甘かった自分を改め、これからは自分に厳しく、しっかりとした学校生活を送っていくことを心に誓います。大変ご迷惑をおかけして、本当に申し訳ありませんでした。」



読者諸氏がこの生徒のクラス担任だとしたらどのように判断するだろうか。

岡本氏は、この反省文を刑務所の受刑者に対する授業に使用している。受刑者の多くは「早く謹慎を解いてもらうために書いたウソの文章。上辺だけだ。」と答えるという。その理由として悪いことをしたらとりあえず上辺だけでも謝罪しておこうという考え方方が根付いているからであるとしている。

以前、高等学校では問題行動を起こした生徒に対して一定期間、自宅謹慎させることが主流であった。近年は各学校の状況や生徒の実態に応じて、登校させて指導・支援・ケアをしていくことが主流となっている。

一番重要なことは、問題行動の至る過程・背景、特に生徒自身の内面（自分の心の中に溜まっている何らかの否定的感情）が全て表に出されることによって、初めて自分が起こした問題行動の過ちに気づけるということである。ここから本当の意味での「反省」が始まるのである。岡本氏は、教師による「励まし」が生徒の心に負荷をかけることにつながると指摘している。教師（学校）は生徒の内面を深く理解し、真にその生徒の今後のことを考えて指導・援助などをしていくことが重要である。



### 【引用文献】

岡本茂樹著「反省させると犯罪者になります」新潮新書(2013):引用許諾済  
詳細は、月刊生徒指導2025年8月号参照のこと。

田村徳至（教職支援センター 准教授）





人文学部

人文学科

心理学・社会心理学コース 4年

井口 沙穂 さん



## 観察から実践へ



私は、普段からボランティア活動でお世話になっている松本市立旭町中学校で3週間の実習を行わせていただいた。当然ながら、ボランティアと実習では持つべき視点も振舞いも異なるため、ボランティア気分で行かないことを第一に実習に挑んだ。また、主に担当させていただいたのは3年生で、受験前の大変な時期ということもあり、緊張と不安でいっぱいだった。そんな教育実習で苦戦したことは2つある。

まず1つ目は、授業のテンポを作ることだ。英語に限らず、授業においてはテンポや間が重要になる。大学の指導法の講義や模擬授業でも言われることだが、実際に生徒を前にして授業をするうまく取ることができず、苦戦した。緊張や慣れ等の経験の問題の他に、英語技能の実践、生徒の手の動き等を見すぎてしまったからだと考えられる。こういった、テンポの悪い授業では生徒がついてこられなかったり飽きてしまったりする。そのため、実習期間中は自宅で授業の流れを練習したり、指導案の内容を読み込んだりして授業を実施するようにした。また、どの程度で活動を次に移していくのか見極めるように注意して授業実践を行っていった。その結果、研究授業は一番良いテンポで実施することができた。

2つ目は、生徒の主体性を伸ばすための教員の言動についてである。旭町中では学校教育目標の中でも生徒の主体性を重視している。しかし、生徒の主体性に任せることと放任することは異なる。どの程度教員が口を挟むのか、常に考えさせられる実習だった。そこで、最初は指導教諭の動きを観察して学ばせていただいた。担当が3年生ということもあり、基本的には生徒に任せているのが印象的だった。また、教員が何か発言するときも、教員主導の場面と生徒主体の場面でニュアンスが異なり、後者では活動に対して共に取り組む姿勢の発言が見られた。以上を踏まえ、実習中は場面に応じた発言の違いを意識して生徒と関わるようにした。その結果、自分の中で場面の区別ができたことで、それぞれに応じた生徒との関わり方を掴むことができた。

最初に心配していたボランティア気分というはさほど問題もなく、むしろボランティアを経験していたからこそ教員の動きを深く学ぶことができた。この実習から得られた貴重な経験と、実習校の先生方からのご助言に深く感謝申し上げます。今後も自己研鑽と経験を積んでまいります。





農学部  
農学生命科学科  
動物資源生命科学コース 4年



福元 海輝 さん

## 教育実習での学びを振り返って

教員採用試験 合格!!

私は神奈川県にある母校で教育実習に臨みました。中学3年生の授業と学級を担当し、3週間生徒たちと共に過ごしました。授業にも積極的に参加する生徒が多く、掃除や給食配膳も生徒主体でどんどん進んでいくような学年で、先生方も「自慢の学年です」とおっしゃっているような恵まれた環境で実習させていただきました。

生徒たちとたくさん関わるために、私は授業準備などが無い時間はその多くを3年生の教室周辺で過ごしていました。そろそろ気になってくる高校受験の話や部活の話、行事の話などたくさん話して距離を縮めることができました。指導教諭の先生から他愛もない話からも教師と生徒の信頼関係が生まれると聞きました。生徒と関わること、生徒を知ることは何より楽しいので、実習を通して積極的に話すことができてよかったです。

教育実習を通して最も成長できたことは「指示の出し方」でした。私が初めて授業を行ったとき、班活動を行うときに会話が止まってしまう班がいくつかありました。指導教諭の先生に相談すると授業の内容ではなく何をするべきなのかがわからなくなっているかもしれませんとの助言をいただきました。これまでに見学させていただいた他の先生方の授業を思い返すと、今やるべきことが常に黒板かテレビに映し出されていることに気づきました。そこで次に班活動を行う授業では話し合う内容を黒板に書いてみると想像より多くの生徒が黒板を再確認する様子を見て取れました。大学生相手の模擬授業では指示が通りやすいことも多く気づくことができませんでしたが、実際に生徒を前にすることで指示の出し方について学ぶことができました。

私は授業を作るときに楽しく学べる授業を目指していました。実習最終日には「先生の授業楽しいしわかりやすいから長野に帰らないで～」と言ってくれる生徒もいて生徒も楽しんでくれていたことに達成感を感じました。

短い期間の中でしたが、この教育実習を通して他にも多くのことを学ぶことができました。そして実習校の先生方の現状に満足せずより良い指導を目指す姿が印象に残りました。私も来年度から教員として働くうえで常に向上心を持ち、学び続ける姿勢で臨んでいきたいと思います。

### 教職支援センター 9~11月の動き

○教職実践演習授業参観（松本地区（8/25～10/17）、工学部（10/7～10/15）、

農学部（10/8）、繊維学部（9/2～9/17）

○長野県教育委員会との連携協議会（9/2）

○教職教育部会（9/16）

○長野県教員育成協議会（11/11）

○第2回教職支援センター運営委員会（11/27）



# 地域連携パートナーからのメッセージ

## 松本市オンライン教育支援センターで輝く信大生

松本市オンライン教育支援センター長  
瀧澤 公也

今年度、松本市オンライン教育支援センターの活動に、信州大学の3名の学生さんがスタッフとして参加しています。

松本市内には、4つの校外教育支援センターがありますが、距離の課題や外出そのものが難しいといった理由で、利用の希望があっても利用できない子どもたちがいました。そうした中、コロナ禍のオンライン授業をきっかけに、「対面は難しくても、オンラインなら参加できる」という子どもたちがいることが明らかになりました。同時に、他の自治体でオンラインを利用した支援の成果が報告されるようになりました。そこで、松本市では「誰一人取り残さず、必要な支援を必要とするすべての子どもたちに届けたい」という願いのもと、令和6年10月に松本市オンライン教育支援センターを開設しました。現在、Google ClassroomやMeet、3Dの仮想空間を活用して、小中学生の利用者とつながっています。学習支援が主な目的ではなく、利用する子どもたちの希望をできるだけ取り入れながら、安心して楽しめる居場所として、人や社会との「つながり」を育み、充実した生活をサポートすることを願っています。

学生さんは月に数回、仮想空間にアバターで参加しています。仮想空間内のチャットやボイスチャットを通じた雑談、かくれんぼや鬼ごっこ、飲食店ごっこ、「私は誰でしょう」や「しりとり」などのゲームで交流しています。子どもたちからは「話しかけるとちゃんと反応してくれて嬉しい」「大人だから話をよく理解してくれる」「遊びを考えて一緒に遊んでくれる」「賑やかで楽しい」といった声が聞かれ、学生さんの参加を楽しみにしています。8月と10月に開いたオフ会では、プラネタリウムの観賞やゲームを通じて実際に子どもたちとの交流を深めました。学生さんも「子どもたちとの交流は楽しい」と語っており、双方にとって充実した時間となりました。

学生さんたちは、自分の経験を振り返りながら誠実に子どもたちに向き合い、「よい経験ができている」とお話し下さいまして、私たちセンター職員にとっても大変ありがたい存在です。来年度、松本を離れてしまう学生さんもいますが、オンラインの強みを生かして、引き続き活動に参加してくれることを期待しています。来年度も学生さんたちにご協力いただき、子どもたちへの支援が一層充実することを願っています。



### 編集後記



松本キャンパスの銀杏並木が落葉し、黄色の絨毯が敷かれています。朝日と共に眼にまぶしい鮮やかさです。学生たちは、冬支度を済ませたでしょうか。例年より早くインフルエンザの流行が始まっているようですから、健康管理に気をつけたいものです。



(広報担当 橋本萌)



■〒390-8621 長野県松本市旭3-1-1 ■TEL: 0263-37-3367 ■MAIL: [kyousho@shinshu-u.ac.jp](mailto:kyousho@shinshu-u.ac.jp)  
■URL: <https://www.shinshu-u.ac.jp/institution/kyoushoku/index.html>

